

岩波  
講座

日本文学史 第五卷 中世

西行・実朝

窪田章一郎

岩波書店

西行・実朝

窪田章一郎

## 目次

|        |    |
|--------|----|
| 一 序説   | 三  |
| 二 西行   | 六  |
| 1 生涯   | 六  |
| 2 作歌態度 | 八  |
| 3 作品   | 三  |
| 三 実朝   | 七  |
| 1 生涯   | 七  |
| 2 作歌態度 | 九  |
| 3 作品   | 三  |
| 四 結び   | 二六 |
| 参考文献   | 二七 |

## 一 序 説

西行法師（元永元年（一一八八）—文治六年（一一九〇））と源実朝（建久三年（一一九二）—建保七年（一二二九））とは、古代末期から中世初頭にわたる歴史の変革期に、あいついで活動した。この二人は直接につながりはなく、実朝は西行の没年の翌々年に生まれているので、生存年代に重なりあうことはなかった。しかし元久二年（一二〇五）三月二十六日に竟宴を行った『新古今集』を、その年の九月には鎌倉で手にしているの、集中で最高歌数を占めている西行については関心も深く、歌集をとおして学ぶことも多かったろう。

『新古今集』が一応の成立をみた元久二年は、実朝は数え年十四歳であり、西行は没後十六年目にあたっていた。一人は集中の第一人者としての扱いを受けたが、一人は世代の若さのためにその後の切継のおこなわれた期間にも選ば入れられることなく、はみ出してしまった歌人である。しかし和歌史上の新古今時代を考えてみると、この二人はこの時代のはじめとおわりとに位置を占める個性のゆたかな存在となっている。社会的身分もひどく隔たり、作歌の環境も異なり、生存年代も重なりあっていないのであるが、歌人としては共通するものを持っていると思われる。西行は『新古今集』において、実朝はまた定家の撰者となった『新勅撰集』において大きく認められている。ともにその時代で価値を認められた人々であるが、そのみではなく、その後の長い時期、現代にいたるまで、同時代の歌人群にまさって親しまれ、生きつづけてきている点が共通している。

『新古今集』は後鳥羽院を中心とする都の歌壇から生まれている。現代の作品を積極的に採り入れ、新しい歌風を主張したもので、抒情詩としての短歌のさまざまな姿を重んじ、心の深い作品をもとめることにおいては、俊成も定家も後鳥羽院も、その歌論で共通していた。古代末期の貴族の生活気分の緊張した社会的条件とあいまって、文学の

中心である短歌は、一つに燃えあがり昂揚する一時期をむかえたのであるが、その中心となったものは、俊成・定家たちによって代表される御子左家の歌風であった。そして、新古今的なものが、短歌の一つの典型として確立されたのである。それは、万葉的なものと対立関係に立ち、和歌史上にそれまで見られなかったものの確立であり、古代和歌の到達点でもあった。それを万葉的なものとともに典型とみるのは、後の短歌史にこの二つの様式が生きつづけ、またひろく詩歌史の上についてみても、俳句や詩にこの二つの様式が成立すると見られるからである。

『新古今集』の新しい歌風は、さきにも触れたように、心の深さをもとめるものであった。しかしその心はいかなるものであったかという点、『古今集』以来の伝統となっていた優にして艶な心であった。その意味では勅撰和歌集によって積みかさねられて来た歌の心を継承するもので、古いものでもあったのである。定家は『詠歌大概』で「情以<sub>レ</sub>新爲<sub>レ</sub>先」と言い、「求<sub>二</sub>人未<sub>レ</sub>詠<sub>一</sub>之心<sub>レ</sub>詠<sub>レ</sub>之」と注を加えているが、その新しくて、人の未だ詠まない心は、「優」「艶」をはじめ、「をかし」「あはれ」「やさし」「さび」というような歌論用語で言われる範囲内のものであった。これは『古今集』以来の伝統的な美で、とりわけ新しい歌の心ではなかったのである。しかもそこで求められた新しさというのは、心の質的飛躍を獲得したものにほかならなかった。その心は表現をとおして理解されるほのかにしてかすかなもので、韻律的な調べとともに生きている気分と、繊細に形象化されたイメージとであった。短歌の内容である心が、意味的なものから気分的なものに変化したことは、作者としては胸奥の機微を表出することであって、新しさを求めるとともに一方では深さを求めた、その深さにはほかならないものであった。古代和歌が最後にたどりついた境で、質的飛躍があったというべきものである。

しかし新古今的なものは、詞の問題をはなれては考えられない。おなじく『詠歌大概』で「詞以<sub>レ</sub>旧可<sub>レ</sub>用」と言い、「詞不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>三代集<sub>一</sub>。先達之所<sub>レ</sub>用新古今古人歌同<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之」と注をつけている。ここで注意されるのは、新しい心は、三代集あるいはそれに準ずる古歌の詞を用いなくては表現できないということにその新しい心の質が示されて

いる。この事情を端的に示すものが、これもまた『詠歌大概』に書かれている本歌取である。古語の含蓄を生かし、古歌の二句に加うる三四字を用いることによって古歌の全体を連想させる方法は、必要にして欠くべからざるものであった。古語と古歌とは作者と享受者との間に共通に生きていた。それは高度な詩的常識という知的な域にとどまらず、生活の中に感覚として生きていたのである。新古今的なものの中核といわれる美的な気分象徴歌は、古語と古歌のこのような条件の上に成立した。短詩型の限られた制約の中でこれ以上は求められないと思われるものが表現された。これが俊成・定家たちのいう余情、景気であり、それらを綜合したものが新しい心であったと理解していいであろう。旧い心と旧い詞とをもつて新しい心を表現しようとしたことは、古代文学の伝統を全面的になつたものであり、内にとざされた回顧的な短歌であつたけれども、さらに重要なことは、それを内から絞り出し爆発させるように、それ以前に見られなかつた気分象徴歌にまで積極的におしすすめたことであつた。しかしこの歌風も、それを成立させた条件の基盤となつていた後鳥羽院歌壇の崩壊と、生活的緊張の喪失とによつて、もろくもほろびていったのであるが、象徴詩の域につきつめた典型として後世にまで生きることとなつた。

西行はこのような歌風が形成され主流となつた都の歌壇からは圏外にいた。歌風もまた異つていたのであるが、当時の歌壇で高く認められたのは、どのような理由があつたか。実朝についてもほぼ同様のことが考えられるのである。二人の歌人はそれぞれの個性をゆたかに持ちながら、短歌史上では共通したものを持っていると考えられるので、ここに小論の問題をおこうと思う。

## 二 西 行

### 1 生 涯

西行は藤原北家の房前の第五子魚名の末で、従五位下武藏守鎮守府將軍倭藤太秀郷の九代目の子孫である。秀郷に千時・千常の二子があり、鎮守府將軍千時の六代目に陸奥国押領使清衡、つづいて出羽国押領使基衡、鎮守府將軍秀衡とうけつがれて、平泉に三代の榮華をうたわれた。一方鎮守府將軍千常の五代目の子孫左衛門尉公清から佐藤氏を称するようになってゐる。その孫左衛門尉康清が西行の父である。母は監物源清経の女で、その間に仲清・義清の二男があった。義清は憲清・範清とも書かれ、これが西行である。系図についてさらに加えれば、佐藤氏をはじめて称した公清の子には季清・助清・公郷・公澄があり、季清は西行の祖父、助清は首藤氏、公郷は後藤・尾藤氏を称してわかれ、さらにさかのぼれば、関東に勢力のあつた足利・結城・小山・大屋・左貫の家々、また近藤・武藤・大友などの家々は、いずれも秀郷の血をつぐ一族で、全国各地に土着の武家として占めていた勢力はあなどりがたいものであつたと考えられ、新しい中世の歴史変革期になつて生きた人々であつた。

西行は後鳥羽天皇の文治六年（一一九〇）二月十六日に河内国の弘川寺で七十三歳で没したので、生年は逆算して鳥羽天皇の元永元年（一一一八）、この年は平清盛の生年でもあり、清盛より九年長生きをしているので、生涯が源平の動乱期であつたことを示している。西行の伝をする上で、頼長の『台記』康治元年三月十五日の記事に「以三重代勇士仕法皇、自俗時入心於仏道、家富年若心無欲、遂以遁世、人歎美之也」とあるのは最も貴重である。時に西行は二十五歳、出家のことは去々年とあり、また『百鍊抄』の記事とあわせて、それが崇徳天皇の保延六年（一一四〇）

十月十五日であったことが知られる。在俗のときの義清は鳥羽院の北面の武士として仕え、左兵衛尉であった。佐藤氏が代々衛府に属したのは公清以来のことで、重代の勇士といわれる理由があったが、これはただ家柄だけのことでなく、二十三歳までに勇士としての器をみとめられていたにちがいない。鳥羽院がとりわけ西行を寵愛されたことは明らかな事実であるが、それは歌人としての才能、蹴鞠に秀でていた資質も関係はあったろうが、それ以上に武人として認められ、佐藤一族の武力と富力とに将来を頼みとされるところがあったと思われる。晩年に頼朝と兵法を語って一夜を明かした『吾妻鏡』の記事も、出家後の文覚との伝説なども、ただならぬ胆力の所有者であった面影をつたえるものと見ていいであろう。

『台記』に、重代の勇士といい、家が富み、年が若くて将来のある人物であると記載しているのは、頼長のみではなく、ひろく西行をみる世間の眼であつたろう。佐藤家をはじめて称した曾祖父の公清のときから宮廷人としての地位は低く、義清の昇進も限界が示されていたのは明らかであるが、一族を背景とする武力と富力とは、実力者としての社会的に低いものとは思わせないのが歴史の現実であつた。義清の突然の出家を歎美した理由はこのへんにあつたと思われる。生涯の根本問題を選択してゆくのは、窮極においては人間の資質によるのであろう。義清の行動を歎美した頼長は十六年後の保元の乱に命を失う一人となつたのであるが、人生の一大事は、与えられた資質が人間の奥深いところで決定してゆくものようである。若いときから、仏道に心を入れ、無欲だつたというのは頼長の理解であつたが、多くの犠牲のもとに選ばずにはいられなかつた宗教と文学とは、義清にとつてはいかに生きるかという苦悩の果ての大きな欲望であつたわけである。出家は自己に誠実に生きるための唯一の積極的行動であり、このスタートが西行の歌人としての生涯を決定したのである。西行の生涯の上で、はっきりと生き方を決めざるを得ない日のおとずれた二十三歳というときが、もっとも重大な時期であつた。それは鳥羽院をめぐる待賢門院と美福門院の対立、崇徳・近衛天皇の皇位継承の争い、保元の乱の予感、というような欲望の深淵におちこんでいる社会的緊張から、人間

修行という孤独なこれまた限らない緊張への自己解放のみちであり、宗教も文学もここで統一されるにいたったのである。

出家後の西行は、都周辺・高野山・伊勢に生活の場所を移し、最後に河内の国で没したが、その五十年間には諸地方の旅におもむいた。東北地方への再度の大旅行をはじめ、四国・中国地方への旅もしたが、畿内はもとより、東海道筋から関東・東北には一族がいて、旅の生活に不自由はなかったろう。六十九歳から七十歳へかけての平泉への旅から推測しても、頑健な健康にめぐまれていたことも思われる。

西行はこれらの旅によって、ひろい自然の中に呼吸したのであるが、それとともに地方の国々に生き生きと新時代をきりひらいてゆく武士を中心とする民衆の生活に絶えず接触していたことが注意されなくてはならない。老年までおとろえを見せなかった精神を持ちつづけることのできたのは、若くして僧侶とはなったが、その出自が都の貴族ではなく武士であったこと、そしてあらあらしい時代の転換期に社会の動向から遊離することなく生き得る人間であったことが大きな要因として考えられねばならない。仏者の立場から戦乱・殺戮の世相をいとわしいものと思い、批判しているのであるが、一方では武士の行動的世界を身をもって受けとめることのできる立場をもっていた。このような矛盾の中で自己をみつめ、内にのみ閉じこめることなく、現実的な明るさをもって歌うことのできた作風は、特殊な生涯とその生き方とに深いかかわりをもっていた。

## 2 作歌態度

新古今時代に書き残されている歌論歌学書は、すぐれた短歌はいかなるものか、またいかに詠むべきかということの問題とし、風体論あるいは技術論が中心となっている。俊成や定家の代表著作である『古来風体抄』や『毎月抄』は、歌壇の権威である歌人たちが、式子内親王や衣笠家良たちの質問にこたえたり、作歌指導のために記したもので、

都の歌壇内部のことであつた。そこで問題となるのは百首歌の詠み方や、歌会や歌合で優劣をきそい、絶えず新しさをとめる短歌についてであり、その優秀なものは勅撰集撰進の機を得てえらび入れられることを目標としたものであるから、作歌や歌評の基準はいうを要しないこととして定まっていた。つきつめれば勅撰集のものの限界が、『古今集』以来の歴史によって形成されて来ていたのである。

「何を」「いかに」詠むべきかという根本課題のうち、「何を」という点においては、「うるはし」「やさし」「をかし」「あはれ」というようなところが、内容の中心となっていた。俊成はこれらのところが時代によって異つた現われかたをしているとして、『古来風体抄』で『万葉集』以来の歴代の歌をたどっている。その理解のしかたは正當なものであつて、現代においてもそれらの美は人間の性情に根ざすものとして詩歌のなかに深くと生きている。しかし、それらのところと関わりあう事象は、勅撰集編纂の形式や、百首歌、歌合などの歌題が示しているように、四季の風物、恋愛が圧倒的であつて、俊成にとっては『万葉集』も勅撰集のものからはみ出す歌集と考えられるほどに限定されていた。さらに重要な点は、作歌の上でのところと事象との関わりあい、個人的なもの、私的なものを避けることであつた。高貴な身分の人々と臣下とが共有しうる一般性、普遍性のある美をもとめる理由が存在したのであつて、ここに公的な勅撰集のものの性格が成立したのである。「あはれ」「をかし」等々の美の形象化には特殊な古代的限界があつたことになる。したがつて「何を」歌うかという点には問題はなく、「いかに」歌うかという技術論と、表現されたものに対する風体論とに問題の中心点がおかれたのである。

しかし都の歌壇からは圏外にいた西行のような歌人にとっては、さらに基本的な問題があつた。それは実生活と短歌とを一つに考える態度論である。作歌のみちと人生の生き方とは別々のものではないという考え方は、中世にはいつて発達するものであるが、西行にあっては、仏道修行者としてつねに自己を觀、ひろく人生を觀るころのはたらしは、短歌を詠むころと同じ態度で統一されていたのである。

西行の歌論は『西公談抄』が唯一のもので、『古来風体抄』や『毎月抄』のように精細ではなく、遺語集とでもいへき断片的なものの記録であるけれど、晩年のものであるから、生涯の到達点を端的に示していると思われるのが貴重である。『西公談抄』は伊勢の二見に庵をむすんでいた頃、大神宮の権禰宜である満良（のち出家して蓮阿という）が西行に学びとうとうとして質問しては書きとめておいた聞書、または鮮明に印象にのこる記憶を材料に、『新古今集』成立後に書いたもので、その成立は西行に話を聞いてから三十年くらいは経過していたと考えられる。

西行は態度論をいうとき「心ざし」という言葉を用いている。それは『西公談抄』ではよりしばしば用いられている数寄・執心という言葉とおなじ内容とみていいものである。「大かた諸道好士その心ざし一なり。侍従大納言の侍りしは、蹴鞠このむは、思ひかけぬ木下に立ちよりも、此枝の梢の鞠のながれむは、いかに立つべきと案ずるなりと侍りしなり。歌好もさやうに思ふべし。又彼大納言のありしは、己は一千日の鞠けたるなり。雨降る日は大極殿、又所労の時はかきおこされて足に鞠をあてしなりと侍りき。それ程に志あらむには歌も何かあしからむ。なほなほ行住座臥に心を歌になすべしと侍りしなり。」という一節は、西行が、当時鞠聖とあおがれた成通の話を伝え、それに託して、作歌の心ざしを蓮阿に語ったのである。成通とは親交があり、出家前の義清時代には、蹴鞠の名手であり、その見解は成通をも傾聴させるほどであったことが知られている。一千日云々の話は『成通卿口伝日記』にも記されているのであるが、『西公談抄』の記事の出所は、若い日に義清自身が直接成通から教えられた筋のことであつたろう。蓮阿も西行が体験をとおしての話であることを十分に理解していたにちがいない。

また「歌は数寄の源也。心のすきてよむべきなり。しかも大神宮の神主は、心清くすきて和歌をこのむべきなり。御神よろこばせ給ふべし。住吉大明神もそれをいよいよ感じ給ふべきなり。」といい、別のところでは「昔上人云、和歌は常に心すむ故に悪念なくて、後世を思ふも、その心をすすむるなりといはれし。此事、実なり。齡満六十にて、余命なしと思ひて世を遁れて一向浄土を求むるに、和歌好みし心にて道心を好めば、まことに心ちらず、やすかりけ

る。」といっている。数寄・執心を西行は『西公談抄』の中心問題としてくりかえし説いているのであるが、そのような文芸愛は神主・僧侶の日常のころと矛盾することなく統一されている。心を清く、澄ませることは、心を散らさず、安らかにすることであり、到りがたい心境を求めることであった。作歌における数寄・執心の質がこのようなのであったから、歌論としては態度論が基本とならざるを得なく、数寄・執心こそひたすらに生活の中に求められるべきものと考えられ、その傾倒の程度は一種の文芸至上主義に通じてゆくものであった。俊成・定家は風体論・技術論を中心に、より専門的に歌論を構成しているのであるが、この人々の根柢にも西行の態度論が時代的に共感を呼ぶものとして流れており、この中世的なものを一段と深め、その角度から新古今時代の文芸至上主義の傾向に合流してゆくところに、西行の位置が高く評価される大きな理由があったのであろう。

『西公談抄』のはじめには、つぎのような一節がある。「さて歌はいかやうによむべきぞと問ひ申ししかば、和歌はうるはしく可<sub>レ</sub>詠なり。古今集の風体を本として詠むべし。中にも雑の部を常に可<sub>レ</sub>見。但、古今にもうけられぬ体の歌少々あり。古今の歌なればとて、その体をば詠ずべからず。心にも付きて優におぼえむ其風体の風理を詠むべしとありしに、なほ何れの歌どもをか殊には本とすべきと申ししかば、空にはいかが、さるにても少々おぼゆるをとて」といって、『古今集』の歌二十四首(うち一首、『後撰集』の貫之の歌)を挙げている。『古今集』の風体を本として、「うるはしく」詠むべきだというのは、時代一般の基本的なことであったが、そこに条件のつけられている点に特色がある。それは「心にも付きて優に」思われる風体を選んで詠めということであった。これは『毎月抄』の十体論のように、短歌のさまざまな姿をつぎつぎに学べというのではない。定家の場合には、短歌が中心となっているのだが、西行の場合には、自己が中心である。「心にも付きて」自分の現在にびたりしている風体を選べということとは、自己を歌い、自己を生かせという自由な態度であって、都の歌壇の圏外にあってはじめていいうることであり、『万葉集』以来の流れをうけつぐことでもあったことを注目したい。おなじ態度は「うるはしく」詠めという点にも考えられる。

「うるはし」の意味は、風体を中心としたことで、一首が綜合・統一された、整った美しさで、勅撰集のものの中心核をなす、きわめて一般的なものであった。西行はこの点については、『西公談抄』の中で「上下の句首尾あひ叶ひてその風体一体」、または「上下相叶」という言葉でくりかえし語っている。ただここでも注意されるのは、風体というものとはそれぞれの歌について考えるべきことを強調している点である。使いならわされていない詞も、また詞と詞との取りあわせである「寄せ」も、個々の短歌に即して適不適が考えられるというのは、西行の歌論の特色となっている自由な態度のあらわれであった。

都の歌壇からは圏外にいた西行が連阿たちを導いた態度は、自己に即して自由に歌えということであったが、そのことを端的に示しているのは、「中にも常に雑の部を可<sub>レ</sub>見」の短い一行の内容である。『古今集』の雑歌は、巻一七・一八の二巻のみである。『万葉集』の雑歌は、相聞・挽歌以外の広汎な内容をもっていたのであるが、『古今集』においては、その雑歌からまず四季の歌が分離し、賀歌・禰旅歌・離別歌・物名・俳諧歌などが分離したあとに残されたものである。雑歌についてまず注意されるのは、勅撰集においては中心的部分ではなかったことである。百首歌や歌合においても、雑歌のあつかわれかたは同様であった。したがって都の歌人たちにとっては重要でなかったものを、もっとも重要視しているのは、明らかに中央歌壇からは圏外に立つものの態度であったことを示している。

『古今集』の雑歌は、大体として実生活の中から歌ったものであり、個人的であった。したがって題詠ではなく、「題しらず」が多く、そうでなければ作歌事情を語る詞書の有る短歌が多いのである。また、歌われた題材、あるいは歌のころから見ると、一七巻の方には、月や老いや水辺の景物を歌ったものが中心となり、一八巻の方には、世の中や、佗びずまいや、不遇な生活などが主要なものとなっていて、「あはれ」や「わび」のころの表現となっている。これを概括すると、仏教的無常観が『古今集』には底流となっているのであるが、雑歌の部分にはそれが素朴に直接に歌い出されているということができる。やがて釈教歌へと発展するものを包含しながら、実生活と仏教的無常

観とがむすびついている未分化の状態といっているであろう。

『古今集』の雑歌には、純真人なつかしさ、人情のよろこびなども歌われているが、人生の悲哀感がその大部分を占めており、多くの詠み人しらずの作者をも含めて浮び上って来る人間の像は、遁世者、あるいはそれを志している者、失意な下級官吏などであることが知られる。西行が勅撰集的な典雅な美を代表する四季の部を蓮阿に読めと言わずに、より実生活的な個人的な雑歌の部をすすめているのは、当時の作歌態度としてはきわめて特異なことであった。この態度は西行の生涯の作歌をつらぬいていたものであって、蓮阿もまた西行の信念と体験とがいわせている言葉であることを、十分に承知していたことであろう。またこの短い言葉のゆたかな含蓄は晩年の西行にして言い得たものであって、かつての『西公談抄』疑書説の誤りであったことを、あらためて確認させるのである。

### 3 作 品

西行の短歌および少数の連歌は、伊藤嘉夫編の『山家集』(日本古典全書)についてみると、『六家集本山家集』と『聞書集』『聞書残集』とに一首の重出歌もなく、それに『西行法師家集(異本山家集)』『御裳溜河歌合』『宮河歌合』のみ在る作品、勅撰集・私撰集に初出のものなどを加えて、合計二一八六首(うち連歌九首)ということになる。しかし、『新古今集』や『新勅撰集』の撰入歌などによって調査すると、撰者たちの手もとには今日散佚してしまったと見るべき資料がなお数本はあったろうと推定されている。

西行は二十三歳で出家してから、都の生活とは直接むすびつかなかったけれど、まったく離れてしまったのではなく、不即不離の関係を生涯持ちつづけた。歌集によって交流の事情がわかるのは、古代の短歌が社会生活と密着している、社交の具としての性質を持っていたからである。このことは、別の観点からみると、『万葉集』以来の和歌史がそれを示すように、短歌はグループの文学であったということである。発表の機会が不自由であったから、近代短歌

の場合とはいちじるしく異り、作歌の場としてのグループは別の意味で重要性をもっていたのである。西行の場合をあとづけると、徳大寺家の人々、鳥羽・崇徳天皇をめぐる歌界、俊成との青春時代の交遊、待賢門院および上西門院の女房たち、大原三寂や西住をはじめとする山里の人々、高野山関係の人々、伊勢の門下たち、俊成を中心とする都の若い歌人たち、これらのグループとの結びつきが、歌人としての生涯から切りはなせない関係をもっている。はやくから出家して、都を離れ、旅にしていることの多かった西行は、ある時期にこれらのグループと接触をもって作歌をしていたのであるが、俊成・定家のように生涯のほとんどを官史として過し、都から出なかったような歌壇の主流の歌人たちと比較すると、明瞭に圏外の者であった。

『山家集』には題詠もかなりあるが、多くは詞書をもち、または題しらずで、のびのびと自由な態度で作られた作品が多い。『古今集』系統の短歌をそのままうけついでいるものが相当数ある点では、当時として古風であり、素人的でもあると批評されている。また、心をさきとして現実感を率直に歌い出す点では、この歌集が当時としてはまったく珍しいもので、ある程度まで自画像をかいている趣きがあると批評されている。そして玉石混淆だという批評もうけて来ている。しかしこれらの批評は、伝記が示す生涯の生き方と、作歌態度とに、よかれあしかれ関わりを持っていた。あくまでもたたかう対象を自己にもっていた求道者であり、生活のこころと作歌とを統一していた歌人であり、また作歌への愛、数寄の精神を生まれながらにして持っていたというべき存在であったから、古風な歌に一方では平気で足をおろしていながら、一方ではきわめて個性的な独自の新しさを、これまたやすやすと歌い出すようになったろう。このように自己に即して自由に歌う歌風であったから、おのずから雑歌が中心となり、『山家集』の分類においても雑歌の部が圧倒的に多くなっている。さらにいえば、四季の分類をうけている短歌の中にも、個性が強いという意味で雑歌の色彩の濃いものがあり、西行としても優れた作品がその中に見出される。また『千載』『新古今』『新勅撰』などの勅撰集に採られた作品をみると、雑歌の部に高いパーセンテージを示しているのは自然のなりゆきであ

つたろうが、西行としては正しく認められたということが出来る。

このような西行の歌風を、発想形式からみると、あざやかな特色がある。それは独白・呟きの形で歌っていることである。

身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけり

これは『詞花集』雄下に「題しらず」「誦人しらず」として、身分も低く、まだ歌人としても認められなかった西行が、ただ一首はじめて勅撰集に採られた作品である。『詞花集』の奏覧は西行の三十三歳のときであったが、この歌は出家前後の作かもしれない。「鳥羽院に出家のいとま申し侍るとてよめる」という詞書のある

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

という二十三歳のときの歌と、形がよく似ているし、心の端的なあらわれである語氣も相通じるところがある。激しく、ぶっきらぼうで、豪族出身の若々しい気魄を感じさせるが、ここで問題にしたいのは、この言葉を自分自身にむかって言い放っている独白の形式である。これは歌人として歩き出した時期にはやくも示した西行の本質的なもので、『山家集』を一貫しているとみていい。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

この歌は「東の方へあひ知りたりける人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔になりたりけるを思ひ出られて」という詞書があり、七十歳の老齢で平泉へ旅をしたときの作である。この懐旧の歌には暗く湿ったところがなく、健康で明るい。老後の悲哀感はなく、回顧の「あはれ」が、華やかな艶と一つに融けあって、人生肯定の立場で歌われているのが注意される。出家当時の若かった頃の作品を思いあわせると、独白の発想形式をとにもするこの歌が、ゆたかなひろがりと深さとを安らかに表現している点では、比較にもならぬ成長を示し、文学としては、老にいたってかえって真の若さを獲得しているということが出来る。人生と短歌とが対等に結びついていた西行にとって

は、この高度な到達点は短歌だけを切り離して考えられる問題ではなかった。

晩年になって自歌自選して編んだ『御裳濯河歌合』や『宮河歌合』は、西行を理解する上で重要なものであるが、

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ

月見ばと契りて出でし古里の人もや今宵袖濡らすらむ

数ならぬ心の咎になしはてじしらせてこそは身をも恨みめ

しをりせて猶山深く分け入らむ憂きこと聞かぬところありやと

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原

津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり

これらの短歌が作られた年代は明らかにすることができないけれども、西行がみずからよとした作品に、同じ本質が生涯にわたって貫かれていたことを理解していいであろう。

右の引用歌はすべて『新古今集』に選入されたもので、勅撰集的なワクに入ったものであったが、『山家集』の雑歌には、そこからはみ出る、優れた作品があった。ここでは細かく述べるスペースが与えられていないが、「嵯峨に棲みけるに、たはぶれ歌とて人々詠みけるを」(『聞書集』)と詞書のある連作は、幼童時代の遊びを回顧した作品であり、「地獄絵を見て」(『聞書集』)は長い詞書をとどころに挿入した連作である。又、旅先きで目に見た海人の生業や、木曾義仲らの戦争にふれて歌うような、いわゆる社会詠なども、数は多くないが、当時の歌人たちの歌材とはなりかねたもので、短歌の心と詞とに対して、ひろい視野と自由な態度とをもっていて、はじめてできることであった。

発想形式としての独白・呟きは、『万葉集』に多く、『古今集』で減り、『新古今集』で少くなっていたものである。また雑歌は『万葉集』でもっとも中心となっていたのである。西行がこれらの要素を『万葉集』とは対蹠的な『新古今集』の中に生かしたところに、新古今的でありながら、異質な、特色ある存在として認められ、『新古今集』そのもの